扶桑拾葉集　三

雑火第三号

和書
一〇四六〇號

和書門
類
一〇四六〇號
一一六函
四架
三五冊

内閣文庫
和書
類
一〇四六〇號
三五冊
二〇四函
七架

内閣文庫
番號　和10460
冊數　35（5）
函號　204　144

三ノ五

国立公文書館
National Archives of Japan

扶桑拾葉集巻第三

目録

熊野紀行　釋增基
遠江の道記　同
子日行幸奉和歌序　平兼盛
庚申夜奉和歌小序　源順
家礼集の内　曽禰好忠
又　同
又　同

紫香藏

天禄歌合序　源為憲
同跋　同
行幸高陽院應制和歌序　善滋為政
家の集の内　加茂保憲女
又　同
應詔和歌序　橘正通
枕草紙跋　清少納言

扶桑拾葉集巻第三

参議従三位兼行右近衛権中将源朝臣光圀編集

熊野紀行

釋増基

いつはかりのことにかありけん世をのかれてこゝろのまゝにあらんとおもひて世中にきこえたかき所〃をかしきをたつねて心をやりかつはたうとき所〃をかみたてまつりわか身のつみをもほろほさむとする人ありけりいほぬしとそいひける神無月の十日はかり熊野へまうてけるに人〃あまたおくりもすとていつもの有けれと我のみてうらとまう

まけまことにきくおもひくらしむかしよりもしてそ
ゆらてまゐる・夜よも出る月に・やゝくとまりて
こまりぬるかの夜月なりしろうて松の梢り
風しきりしてしのぶおもひやるに波の音
さゝふきこゑは○はすらりぬみちとよの
ゆくさきのまゝあらはれかたらふまにふかき神も
まみなふかくありとおもひく

ちきりしもつきて出けるふねの
神の心みえしりしや

うれしくも二日といふ日の名をわかすみゆる
ゆらてつまぬ・これくいろ夢見海をそいでた

りけり・南ハにほひわたくまるのはるかく
かゝあらみがらは竈やあらん・らう垣ねやの
いとちいはまへとはなり・林の名ばかりあやしのをの宅
のまへなども・そこなるにいとあるものや・あやし
寺まハ庭をかる流れてはるかくなりにきさら
ちかきて名ものとゝもそら・経あとよみあらして
人おもはゞあるくなりけり

ごまこうさり庭の玉はなみはえの
神はひとりけるもの梢り

まくてやしろくまさあるひくいけりかや・
この世いかでかにもあすゝみのあとゞまの

露よりもはかなし・この世のはかなきとゆるか
しらぬ・ゆくも思れはほそいところんとだなりし
帰る人なくて・世といふことおもひをとそへ
すあらんままもなくなり・諸々つくもの中春は
むとせん・秋をりみらをとろへもなるもひよ中で
なくしめそめけるんすく・絵の雲又は月となる
ごとも・せめんのちりおきことくしへ往へ
世中しかいとひはそんつらいかそく
とみはえてまあるはと毎のまむ
いつもかる信左のちりもとてあるかやかへし
紙おりよへしとは・しきまい

まみとのとわのあんいさめのうは
北の空は吹きは寒かまごゆれる月いとあかし
ろしきの濱は天人常まろてりておもれね
やとひはかそへたる木の葉にいてたりる
しこよひのうらもいかそうあかれならし
秋のゆふ空はまくまかものかいさまの露さら
ちらぬ風も霜に降むしうて・世かうつろうて
夜となみあるも・さ絶まつ月に心とかなう
数ありかまなかぬはかしつのるもとあきさ
洲浜まともつれなくもいかまなかにま
あくれあることつきりかし

◦ともしつゝあまの釣舟さしよせて
しへもゆらす井は浦におれらん
月の海のおりくりやともろとも波の志らより
あまぬとかへく
月に浪うつ行かたも又ありあやし
ゆるゝれうのあまにこつや
波いとはるれあやしとまし
浪まもあれうら行よのましとはつれも
ひとしとまろ海士もさて人め
吹との濱にこもれる釣ゆくうとどろる。
あみのそうかあきは

天比こと吹あらしの音にも立浪は
よふさへこそあるとのうそかゝろ
志つのをとに祢そる萩志らの鳴をきゝて
うらむしき妻のゆりにその山の
名とをかり祢くや若をあくら露
いろしろは跡ついに祢つるやゝはあやう
あれへし
石代のより多そといとせきや
いくよかねいひとひさしめし
ちか比浦にこいし記ゆへそ
うかみにゆくそとそん於ひろゆ

さまりのみすまる人もゆかし
こゑんの濱ま志りゆきろ人のごとくやうやう帰
りなあひぬ日しうハりなるまゝゆくて海人
ししてえてこえば人思ひてしゞ濱のとも
しそいつもとしてえて いほぬし あまことにあはん。
物うみのひきはみなすりこくむろひゆきろ貝
とまやまさらりなかをやりきわて このあつ
ひこもまさかなのみかのまあしひ濱くしてぞ
あのうと寸らまたしとそかざき濱をもうつ
むくう氏よそう問とどろ見 海人入ゆつはそ
杉とえてづつろ人こゝある日いてくあるは

はいつて庵主ものかたつゝといへる濱まて
きりもとめといてゆかまことつくたまわりしと
こうやいえくこゝろ人中くまよそ
こしほるき濱いうつひとよるみえとも
いやあしくわはいかられぬゆかり
いほぬし返し
みるめかる浦にきよするぬきとめの
なぎさすぐすくほどくしらむ
なやいひくそらぬばかりは京までとぞ庵主
たきつる神のといふ所ハあかねさしや原
のみやりまといひくそらぬうけおもしろ

のかれくまことゆりわかのとこよ旅のつとめち
しゑぬいありけるて入日しぬかるに歳の宿
られかつゝ時雨いそしうあつゝ
いゝしくあるまじきよ隣斗有
給のうつみてあれしられぬ
御らまはりれてま木のこゝやとふまの森
おはれいあおみまこする家
よろつまの森てみるとまきにろ川
ありひと思ひあちていふうめん
きけれも三日といふ御らすつきぬまて
こゆくりてのかれて唐室いと二三百つり、よの

おりひくこまてつるはまをいてたゝし、まくう
うまりきる人つりとよいさまれしこの城
ちしまあまりのやうよしてまお坊ね
よりやとといてたしろおてどくいり給へと
いひまいまつおかんあつしきんとて甚ん
さまのむかおはゆする、いものしらとより出く
やるとこれらいものくとえつくさつし氏あ
まさやあんといえし人のまよしてらりせめ
といひくきいめいまわれてはそねらそい御
堂へまいりぬがしら給はけしみくとのうらた
はしおつりしこつりつみすしつりにまうてあつ

ゆりて、まいりて、ほかりいでける所、かれを
との御ゆかりにてもありけるいらへのかたの
ちしのもとさ、みのうしきけく思ひやりて、
なりし里川にあはせはかりつかさそへふ
しをはりはかりけりなくみて、あいたるは
うやすもあらむ、まてさぬしのみてに、霜月の
御八かうるわれをのはりはつるます
これはたゝしそくらへのあるしそえれ
人々ひとしせそう
とうかく心中みなよろひけく
うおほ世なめえはれ東つかし

いほりしをちの事しとゝまりて、ひさしうて佛
つかしこそみりよ
さる年へ此月もて出て高はする
こうされる山のたくいれ院にも
まさ年ころ家につかうまつることゝいて
まつとむしは人々をもれく
打らゝみせて遊しつる那
はくさいのほとりに、前栽白のほとりのあいそ
まうそれんとて、ともれ川のはつるゝはるへ
いんまうしきぬひはへし氷もゆかし
すうえんはかりしかやうりてよかしら三條丈

うたはありける

山ふかくすみしをきゝて嶺よりかり

まことつは椙の竹やさきのよん

きそんのひろはなさきそれとむねまと人の

たくみをしりそくとゝりそ名利いしろ

のあらし。この山ははこひりんありそむさ

ちるとをたすとそてあるし名かりんや

いひくそらぬはくとふねしみとつはれ

山のなをわれはゆかりて心の諸

神代にまりことよはゆをり敷

その山の名をばいとして

名にしたつくやくらの嶺のねよ

よそのちかきりとむすひつる

ありし山のありけれは人つまつの松葉をはるへあ

つもりたるかけしてえはまそうさまこひとろ

ゆくそ神のめをけるは

あらはなおはゆさよふすうつを見

えころぬるかもといとうつをめをしるろ

まへの浜の人のまつのいとやかれしまてつまね

見わたやうく岩屋の心すゝ中とさらそ経

とこあをまたるりけりしあまはいろく佛の

出現んよりしそり出るそゆつらんとする経也

天人はねふりくさりてくやしきまれかし
いつまふ小見をまれてむ乃世ま小くる所まてある
体ろこいのち学まろされそろるとはかなき
いまわりしのいやしとてありたく松のか
ありある山なかうろ乃中まいてちまりみち
ことはか楽しきまに祢のさしとなる
はこめくきりの翔とやろほとハ
秋乃花ろりそ久しるまれ
ゆふりま矢風きりそくいらくまとう
ふあるはかりまり乃海れうし風を
まよて本の藻もの江んありけり

天人のたりそくやしきまうとありひく
天は人いとりとうつそもとりや
は乃ちりほいうほくら如ら葬
四十九院のいとやのもとまいてうる極楽乃と
しうわら風まわれくまちハ
う風ま秋こま夜ほしわひく
炒ま如りつとる衆生の雪れ
そそら法とい衆ありうりのあくゑひしたら
所とくそそそと仕いうるやすうらいちほとも
あまと
うつかとはこちつくれしほのそうつと

むかし涼しといふ人そありける
伊勢のかみくされのひたち様に見わたり
といひけれどまだしらで世をも経まて
くれなゐもみえねは松といふ中まどろみぬ
はらく萩のあやまりけれど
旅にあそびいなつまとも松の根に
枕としてもあはれけるかな
あはれがりてやさしほがる露しらぬ
かくすみな人はけるそれなからのなど明り
すかしきのどいつらくいきつつんこそ
思ひてはまことあひたる人はそ実はきこせ

語ひけるをしりてはつらくやおもひける
露とみる男のこゝろにあはぬ涙の
せきとめあへぬかなしさぞあやしき
とありけれみちとして京極の御息所つらら
ありとしかうしいひ女もおとうとと
きて、おしくらはかなき事のあたりせ
し時男ひあつせら枕くなく世事れしや
なとありき
うたに世はもの川涙そなりけり
あらはせよあはれとのいはれなり
いくみしのおもむきはくいまそれなる

遠江の道行記　同

三月十日あはれへすゝめはしめてみつゝゆひたえ
むとをよ
文古はつるさふかゝりぬとも川にふと
河ひかへく人ありけれはしるに
河さき寺とて京とのへなりみるめ
ミやこのみの色ゝなるましく京師は
かよひなれしまゝにせきもる程
さた山のあなたかきりしそ
またみしことなきかきりなり

ゆきむとひきよふのまれなり
人のとうくたり給ふといひしを実相法ちよ
みえいてゝ
うちりけるめはあつかちの家をりも
わすれはえしうして見えさりき
ところにはいつかたとみえくはし
ちよ名はみおいやなよのさもりなる
をかしのつくはみとてそ程く
かのみ山のとねあり雲のかゝれと
うき見山はなとてミ川ふ家なは
うちよりかゝめのとれたる里

ありきとりしみけると
すみなれの井へさくやまぶきは妻とすみて
きひゆくやうかゝるにかはづなく
ゝれぬふもとの山と河とをりはへくれなゐにいし
ちるや
宇治のわたりとすがはらはるをんあそでゆく
ゝやこれ山吹とあはれとことえん
むかしこひわたりくれてむひしかわりし山でらの
文字やけく有しふもと河ゆ吹るりて河む
はちねまくそう河かし山吹の芽をわ中かまし
まへごゝろくあはれと

あはなりごえふくろへし山吹の
むかのいろしとくたちさりけり

又

山吹よの花をしのはる花を
いつこをすみし里ごころまし
そこよりくるしふみのくれねかへてひし花
まれあはれ御まうりきれたちみ人へりし
ふみりのわらをとふそへし花御りしよ御字
からとこるすゑく人くあはまさ侍きと見下
しらぬ人のりもさとよひ出してはよ
歌思よ人しうなそわむひしえん

国立公文書館
National Archives of Japan

又古は月ハみなひとつ歌

又と人はけ々きりまてなりて々わこゆて
なそやかくみえし人ハ浦ありしを
うひすがましをすかとゆりなん
をつまとなきりそあくあひくそその夜
やうきうこえりとゆりく給ろてゆとをあ
まろ又歌

沢りしむおかりかゝみ名とよめ
むくし袖とぬらしつゝら

松そりすゝみねらしくそ
うひすかハ松人てし沢重てま

そはかきる沙はらしみなりなを
山こし山そ門しへたるくと咲て給うき
うし出れわしまりよてそくしてえん

みさむし山はわしきよいにし
すぬ夜あつくとまたこのかり志はとうしく
こまりく。たとみとしみへたみまあし浮し
え木のさきとよくむきてやより給りく。おと
しま出かり出とれかし給ろく暁りしく

松り海やとぬしみつきとそさまゆう
有明の月を袖にくろてそり
志うかみのまろりくそ波しくりはいもしら

終をたちけり

さひ人はらしと見てゆくとさとの
これはそのみゆるとてしるへし
みやこ山の霞はたちかへと
むかしはかはなをとこいへるちゆけり
ふきさきにあらのさけるたりなき
ありし山そともへりさつらねとやも
さりすられたちしの山のすえにたち
はおりひとそやくよすてきて
ありなれとしのりてそ
人をも深く海おはえしのおもかし

なかにたちさらいくしるかよ世と
ふしのうかをたちと
中きとてわさしゆへそれおゆへて
すみ濱名のくしと見をとりん
まかりつきて後霞はありかなわえらくはかえ
ゆき
祖またいふしもありやこゝろおわあかはなか
よのおすよ人はやすらかとを
郭公のしみをきゝて
おもいるはそのことそふつほとゝきすに
志りしるやこれよのこゝろせよ

えこもりのうくさとおもへり

古河とのあたりへとてはに鳥志
うくいすのしこゑりひろうれ
わふさのすうにほ人によりてもちてきたると
ある

我すらい筆にいひてもちうふよりかく
いふうふくれにもつとわくおし
取てかくいれをゆくく

人をいのて衣とそきて竟とて次
よ似つきいてたるへ 本ノミ 見す

八月八日夜をかりゆゐあり

世中のうきのこゑをきかぬあたりは
あやなのほとゝきすれなき
ものはなにもありつけぬ帰りゆくへ
かくきえむとらいふのかはかへく
まくいむかしやをしかるらむ

山寺より梅をとりてもてきたるを見て
文こりは志川えの梅もなくして
まかえらぬ露のやとり哉

子規のうた
我いらはすくものはるけむ
まいにもねく郎女の非

六月七日まうでつとめて

夏山の木のしたかげに露おち
あらためがよりいよ世すりける
哀しすゝる月をながむるあらたよ
つきくいすてさまをこそ幸とうし
見ゆる程よのいかが実の月
つこりて深き深くありまで小枝よく侍りて
侍りて
実も侍ともみゆるかく詠まれ
何ともくりのそ見てこそまりける
おすしみね六月露君葉りかゝるて侍りし

照ともくもて緑えもる玉葉に
いふもまされとも多さるに
七月の作ともいくかつくる人のいまやあし
さるふりくろのあかれ夜すゝなたくに
うくてや我をいとのかりく拜
たすし月うやすれかなと思ひ侍りし
七夕をしとしこゑし秋夕しと
そゝのかあはいはねそわしとそれに

又

何みつとをふとたの光て鈴ふか
いろくらいあらなたれくて

ある僧のもとより、をみなへしをおこせける
しら露おきてゝ咲ける女郎花も
花すゝやいつまて君とこそみし
男のことあすらか、よみ人はもとよりつくゝ詠
人侍らぬことゝおもやうまんとてふり侍
おこせ侍りける
秋ことにふたゝひ見るまりは庭生山
もみちのやいつまりおもんゑね
あるおとこむしのねをと
きてしみかうてゝ様の庭にわたる
深き色ねまとりむしや鳴ぬる

ある僧のくわり侍りむことをいひて侍りしに
君いまはみこやこゝ恋し人まちか
みさのりけくおけくるらね
菊をいとたかう植て侍るをのかり侍りけん
よくむまといつ守侍し
これさきたは花ゆしらる色るゝ秋き
このもさうねゆかる人きらん
とちおこりのえくりこと男よりつかうて侍を
えいらうる守しとこそ侍りける
花の色わこすゑをされてはこその
うなよとのこきく袖かれ侍り

うちのをとりよその春といふらしうちのを
なしりつゝらんはあさねるへきしこ
よりこそ鹿もまことにおもひける
うひとくとおとくさにしめ
京よりおもしろき人ておとは文こそあらう
まかりおひめし人たえをとりしらことかれ
てわかえ給りて
今もとらるへてや入れよし玉章は
むかしのむかしのゆ世すりさは

九月

筆りむとひつすし文とおる人は見給へ
うれしきすことかれとまていとふまと
なよのとくといふ花としろこれ
うへし
似こそつまくいとまるよのすゝれ
ちくの路まえてすぬも志すなし
すば出て十一月演名のくしれともことも
あまく将のいとおりしろたと見給りく
うつりて心志ゆふくるへたは
宇まて波のうちさつてぬ
夜あま宇く康のすくり
高師山松のこすゑに風の

身かしむかしにぞ庵もすさにける
うれしきことありしいにしへの人を

君か代をまつとのうら小浪よせては
松の千年をかぞへおりけむ

おほえけりなるとのうらといふ所のほとりや
さてかの松を見て帰りしるけり

子日行幸奉和歌序

平兼盛

わかれこそなしに絵そさへとめてくみ給はに
こき衣おりしき御鷹のすりにもかくさ家。
かよみゆきけり木のつほきもくめまふ松のこゑ
うひを見てくらさらにみいとうつ山の秋の
きりんらうてをしきみこ紅をようすひ。
まちてむすさい野なる芳の梅はしむすしうるを
みの緒うしするひこらしみくれはい緑き
よしともすむ山のこゑなきうちはの風を
枝とうすさ浪あらてはらくれと扉つくまで遊
中をたましあ緒とくふのみゆきもありゆ
とまりたまかうれさの春かん神よくとれ
むさうはさそへるとよ緑てひまたにそまさき
とよろかみなみたなみしさここいくふの
みゆきさよる見しし色しはらし

是くては此日の和哥
猶ひしるにも此さら捨へきにもあらねは
みよ此さゝに続せ侍りぬるのこけ筆を

庚申夜奉倭歌小序

源順

伊勢の海は清き渚の玉、秋野の花よりも猶綾。
その露さしくゆりて此をしかもはつの
あみの此秋の色にひ留ありあさ枕の上よりく
しき秋と行くしやをのそつれと
松をほしふ。こと此さらに行つる暁ともれ
人御さしのゆりはの枕のあさの露なら。

今よせわくるし殊さる此かまいりのく。
松風の琴なりけることよりつねとくこうもい
あしひきの山おろしに乱るゝ松の嵐のみなり。
むしの音の秋ならす過こゝと此かたちの緒をも
ゝるふるひのみてもあはれゆきさかなうつく。
むら雨もむつしの人の世なはなり。ことに琴の
調つく緒にくちとれ行くて枕然音もやし
すん共もほしくなき声にさふるし調のうへ。
夏もなともうつもり暮てもあやまつ猶もかの
やうからにもやなとりもと色としつこふ
く御まへの庭のもと水にうら之なみのさかの

こゝに思ひあへるを侍らいりくるあまし
きゝおよんはつらしくなりなむとて思ふの御
ことより地名万葉もしるしたるゆへせ侍なるを
後となりけるにもしけるへきをも皆侍て
さるもあらいあは侍よしもしくるこそこゝろ
此さうらうこそるなるなきまゝくるとうしこれ
御かくあるるれもおもしろくこゝろいはるん
とく今はいかにあはしろくこそ後のあと
みゆるにそうれしきこともまくまけれるは
後まことめしありさま
曾祢さきへとにしもの松風を

香りかくれにも千代を経なん
家の集の内
曾祢好忠
あさまだ後のやしれぬらんとるれ
ねの色しけれは春のひとつゝまもてたは
かをしやまつりさくらにたしごろ縁なはしく
いつまひよるくゆくいりの賦にこゝろあはね
やされたゝ後の色も前になくにけりめすく
ねをさけは紙もあくら侍とらるれようてあはれ
めあかをみれくもる侍もおりしとみつりつとへよりたぐう
しられるをれくりたる侍いくあれ事

とみうしなひてちるなのちる春秋おもふさ、本に
きえにける秋の世の月はおもてをきれ夜の
秋風のさひしさをおもふつさまくにさす
なにとはおこなれしくれやの波をくしなよしれ
ならすゆらしかすくと人をみなうみなは波のさ
すなひの波の波かさへ川ななをまかしわささ人
をえんさこそ

文

あはれ夜の花みてちらまありなまく～春
ちりぬる花をおしむる秋をおしむ葉に

同

んをゆく～川をもゆるは出にはなみよむにし。
なにさむしさをとにむをれ人なくおもれぬるやと
のさまをともをまともゆく月のひをとこへりて。
わかてはくちて久るの月のはなりをとを波
るなおもれなるさなりをはなしくれのかは
やれ人はもしとくをなるさしそうれは物を
なにそくおもへ世へよなるはかなしかくも
なのうらなりなきくまにおもをかはまとり
ころはつくもりれるよれと世へなるはなす
くれはなくるなりのみをなるなれはらもれ
のもしにもちしれくいつなはみることもなさ。

秋の日よりはうちわれても・なをとむしのひ
とくし草葉のかけの風よりはとまれく
水のおもてのはるとさり・書れはゆえみるとらと
すゝ流き・のふ人しかせしも露とも・なふわ
おくらの京と露ちまくておりをよかよな
しなれもはれてもゆ庵もん八重葎よりわ
もれく残る行雲れらうてもすゝ・みしもさ
きしもすくなりゆまはなう待くつさねなり
くさのおとにきうしてかをすめこうふと日
よつすくさうしと・もてられうくとわん待く
事・おきくのこゝにつなひつまく志らし御や見

まへ大宮ゝ路の山乃ゆかりしゆう・なきれくしく
花なりにられと・松乃木のみと象を嬉しもも川
ゆまてくれくらのうとや・おさはのうくやまか
みしもられうせぬ花ごとらくうり積をゆう色
とも名とや・くもみすくはうもはおよう所な
よむきを・みそよをよむしもこうなのゆく御れ
庵てそすしゆておともひうせは・なみはすゝおし
きこもしれもゆすし事・とくもとうねとことす
流・すゝれうしなやこはまくられてうつこ残ぬの
男人まことゆう（やう　異ひしきところや）

又

同

これ給おりしれたてあしなりさまされらみの
あまれちしみえくわかりもなつりてこまは
ともゝおもこといふをとらしまゐらせしめ見
みゆるゆゑもはりしきやきなはりもあらし
とみせくら給のうら有たもひきりことの
もにあけしおもひ待つまなる意とうる
のうら有花見へぬる。それなう草れしの風
をまる。おきつかれ花の比へ梅のはつめり
もえうすれなきおりはかへしいもいし後
のあれ夫の色々青柳若菜はくりぬて見

待らん有りそ見へる色をしられさる御けしき侍へ
きすくおかしのおとの葉のうら有くもみて
色のそろこともみてをなりはなくる物也人の後
これることなりさおかこともれ見てそなりくへ御後
らかうとおふるひ。當をあけめくかけくれし
と色にまされや。つれなれ有をこそあれらし
待とならやあくれのとれのすりこもいさくい
へかれもをあせれをはかなくにこゝのそ、
と候まても候ひうれもかしらにれを。なせれ後
るあらさなしをれいてゝ花るにをもれてん
てせんあれ草木とふありつのはりいまし

あきをまつ心のうちにはあらねともおもひ
こゝろしをあはれむ心のいろをこきくれなゐ
もさえ、御らさはあまりものことさりて月の
つゆをやとさしむなしく袖さへまたも
られなくお葉ところ秋をとて御けしきつね
なみたの袖に露のひまなくれなゐの
うつりそひたる事かと露も秋をくらし
おもはく今は時にあらぬとなりとそしれをなんう
けれやうしなふしてをかはりしや

天禄頌合郎　源為憲

あまたよもとせんなかくをしくおもふへの
逢れぬよもこさらてりたへとの草の
うたをこめりしかなのやすらかしく小萩
をとへとも行桜虫をもしとなるゝ露
わかれてやゝくそれもの有はかなく哥
とかくゆつるかな有、とのゝみてるくり
われもしやおもひ山里のかたはらに
かれさしりも、おもひうつれもとやの
いそはらり芦鳥はのとらはつくりく
草ともおはしむしとせるをなそり花
はなをこそ花のおもさ御むしれをとゝる

といはまてをいてれりしかりと。うしぬとゆて
まをまゐりね。清さ先海さ次亀え也れ
かせあみ有ち荒れの稜中。前和泉守源順
網られ。おかやさりられ大人々らに
ゆらすめくれなき成なりて人八人々らら
有さみてゐし人さりと。おち格をめしゐ
こそ御さらくれんよりろしかりめとやよあ
てら行くそれ事也はすく為。今歌ともを
ましきお先事のんあるとくめし知り。かてきく
のはさをへしと色ありあはいなと宮の君
遠こゑりきくろのみれ。御ゆつゑむひ。かゝ義

せりたち花のまはみちらよろしわ宮こせ。
ありさまの絵たりむとてせ堂童たぬめ
しそのまえ事とつれとこせ御さ。さやまり
たゆめりまんれ有しえ分をとくつま庵くを
すく。ふ梅てり身ま花のあそおりぬは。えされ
ま也やうみてゆしつを承るてゆきと。やむ
こともて御まつ梅ここの梅をこころさゆか
いてもの草也ゆゑをみてかりせこと也い
なむろさに。ぶるをとをりはみよまろえ
はくれししあるそくまうそく。それ命とを
頼朝卿の御さためありせ給ふ判くわん

同跋

同

秋もくれさゝの舎にけふはいりけくらや
このかみのとしごろえらびあつめて
しるしおかれたる此のくさぐさのうたをこゝより
岡ゆくまゝをのむおつまにゆるし今は草
のかげにまつり雑波のうらのなにしおほきに
ぬさたつるとおもひたつ輩はいよいよ
まれなりの門人をあつめてかりいよよそとれ
ゆめんかも桃みんし言のうらみも此の
よし状をもゆくりなくもありしとてゆ

かこれくさこと此たる色られの給へるくに
きりら後いて此さこそも侍らぬ先徳あれ
さと尚き梅いていふ書て渋ことやられ
ま此おまへかくさしめるにぬみなりや
よかりんやて陶うるはしこて易陶さてみら
侍らるやう

霜月のゆふる幸やはなれ給ふとも
とるへしかはあはれさこゝろも
今日此刊とみ侍りしといぬつくまて侍
るを出さんてよらゆしにみてゆらにとゝけ
なさはれとなきてらるゝのなう此わひ

しんのむとか・ら給のれなれさせつしかく・
秋の夜行御ありさやうさ御さるつさこ
これ書ともつかへあらせ給ふなり・おほんの
道の御ゆるし給へ月の色の世にゆかある
よ・花の文くにしらえて給へり・風流
秋さしてりすをゆくよ・出のしふくとも
きわらせ給ひかしれ事やともにこし
の御捨く、いまはすともまかせんとて給
のもさ露ありおほえまかしもし殿次・
おもさ升くれはみれ給ふまするかさ申し
先し二夢・出入よのしも給ふこ比しやくし

人ところの行うしに御らつてつのらゐっ
あましてれくさ物出けん・故所きらん
なりとれ権守源のおほしめしれ朝臣し
二夢・さるなりゐゐまよ庵さともに給さ御く
冬さよるゐまへつもら給ありつれゐまおそれあさ
二首中やう・御さあらゐともれきれまへの
花れ文・出の数ありさんあらまし字なとも
中て為御らせかかせゐかのせ給ようお
くなおくさうてれてさ・おそしるとも書を
御く はりとうれまうしたくまう利
ねく・天禄とのよとしらし御つもくことを

九秋のなかくすれ月志ゝもせ九十日よい
酒よりくどこさくせんなりて

行幸高陽院應製和歌序

善滋為政

初かさきしの泉天の下よみちさえふとりて
されぬよりいひ日比なかのくくきまとさうえたく
し酒しあとかゆくもあさめりしさるすかか
てのみ舞の里比風月よのれ清く朝夕
よりわこえしさ事あるまとうはかしこれをと
めなみ比んのとけさ世よゆかくのりはり
ことばをへをとるをせぬよみ九比をかいり

うらさみをいりせのよ比雲居てこえれ
きれなりしむかもとてに百寿比かんり
いくさとをさゝさ泊ほしにいかし亀とかは
くれぬの所あるよあさしく花のいろ紅
流てをきつて只まのうてすなみつ紀亭しさおや
しさ草本代かのせうへかしあないもほん
とかをくるへ亀え家亭世をとより亀さふとや
ゝ只方比海をとろ有よ世しぬまへ家花の
みをさをもへし九その家と御らむ露さ
きんとて中宮長月の十日やうか有あかう
さ海よわらしせるぬまへ家の風よわらと亀

ことこそのみこゆるさせこ給はく、名残を深
よ御あそびありくおく給ひきよみける心に
秋の夜をくだちせまく。秋来月をくねすく
てうせうはけあそびたれ上達部殿上人ぬひ
つきたよろこびこの菊ぞこしくまかりしりの
御事を題めく。和哥をとりくまつりせさせ給ふ。
此ことをかりこし人さらじみとくなるぬさまなりを
付ねせりをぬりて、言葉のちやしを花本よ
まりく、花のおりひをもと枝よなり。ちかし
えれいはくおさくあり御字は人すくなく
秋くさどもあちられただはしめしこと。あとくろきれ

ごしるう之御意見あらそひしよりしは
进とかく心へさせぬまへしとちる心うぞ
家の集 所引
賀茂保憲女
ちそしぬの世中をうくこともれはいしくも
木のしられはさらくのうしともめしやく
こ流るに家月日れるうらりともじ也とも秋月れ
守とのしさ日としあなりもとり。そしれはをれ
ましに桃たともひしめりまかゆえよたもひ
まろやうらられいよりといるとしま高くらつる
わるかてとろつことを河しうる渡はうるのいむしと

いろところはつきてこゑところへ男をとりてぬ
あしかれ徒をもてむしにきてりまりを
とりへ色ゝ深くさしきをりなしつゝ深い
そんや都とありいあつゝ深らや梅の林代り
えきとえうしろ紀ものかし宮あろ我々をとよ
とうとゝ又そ又川よあらんいとゝ又をと見えり
と海かまいと似とあかく又そゆまるこ似らく
梅の花さくやい色とことくほ起のちとよ
きくとのつゝわきりぬをとへあるみかへかえ海
我まさらをつさめ色うゝるこみくうすゞきう
とあやもねへうまあしふかとくかんるさ海よ

あさのなかまれ家としもにつゐやまさり、はらく
あれけひよともぬつゝむことれこ縁もやし
大勝とゐるをくへとれそといふまれや、たまの
うこに男としつひゐことなあきこゝおろか世を
そしきのまにたりしいつくらに縁をふきこゝ山よ
いまつくえれをかきくいしのあこに男よか
きゝくこきれうつをこさ葉をつさめて松
れなくぬこれよそひとぬるへしこゝう
さるありらく我をとぬもつこて、心世よりそここ
とや川しあしひとりねゆくされそ露
よめ待くされらくりみ、わきしらむあわり

とみし人の川とめることあるとくわしふ男
ならひしられ人のことわりよんすいうしらかめ
ぬまめそなのみこえともありくたゝし
ろさことをよれよつきて見えこてるこゝ色
へむくかにあられ給日めならぬにわ給ゐ
まこいへよ露のとの流しりぬりとあんせむ
しめとのはうつされきしてせくこれとのつゝ
らかれ気と見えを川うしさ海しあらことと彼み
結をけり男めなのしきこと乃ちてさらをい
と陀さめ白わ母まれいまうきもとらう哉
ぬのとみのすゝ乃くし又彼いまとしめおいゆ

くましにあくまなかくとはたりへゐいやしき
めんこともと次第ならはなしはくなりはれんこや
なみあつことなしうれゐに心地つみなき給く
あしぬあらなろつへの衣ゆうくく給ふ身のし
くれあいしき中のみ庵めんとしてかれ宮人
よろれはとひておへとこはまんむ程よたまい
とかきこくてくへりゝは川くれはまかりとなり
てくもことともよみまうてとこはめんおとしいまう
しまい水よりまん清しとさてり見んみせ宮[?]に
とこつ給をんすくされるはよ々給ふうしら給
いつひあろさ海よりくなし前をたりしろはこ

しげんにこそなりぬ。されはえいやむし。やうし
さことは万葉といふいくゆれしだまりかす庭
とうさかを。昭かれわらしらむととあしむしに
すれゆすもとこえきうとひみとき。ゆれゆえの
うちにいまてく。月かりとおもれむせ。となりへと
こひちなるにおもへるよ。てるかりそはちゝ
をいかしう浪ゆかなりはこそまさ昭かしにて
ならちとい庭しう浪。夫はちの月の乱しの子よさ
く事は浦あし。あんうしぬやまよおさはをみ
ちてうもそらしのやましに。ちらの乱絶ちをとき
こそわかみうにとむ月のうちたるすれあ

ようてもんこそおもひかけこさうろうく。ちい
されうしを。なすしはさ海へうくあし。やとおりへ
とふとちもとれなん人のゆく徒めさかへおもうろ
なこともうしといはとし。ふとはまうたうむとはを
とらむもさいなととらぬめろこと波客の林り縁さに
いわうとふとはりしられなりさ以へとふゆの八雪ふ
これをとうをしなりへとおしはさの身へしゝ
をさきもし以つをはふゆいてくれいさへなるあ
なともをまもせうとは以まりとなの川
ようなくおもし紀苑よをとしこよふ。露も以
よりとに袋はもりかけしておもふこそやれし。

きりのねのひいつもなかれどすゝりのみいて
むつきあやめふくさみかりのせこへとも。たちはなの
白すゝむ頃にむかしくゝりのあかきいろよ。
つらしれめいまをある月しさうちゆくこいろ
ともぼ。秋よにおもしぬいかゝしもおかへをあらは
さにまへしちらしよそしかめからなほたちしなへいいう
てか色こくのなかしじうこれかしらてわさ
すゝれはさらすかきのれいかさらく見えて雨あめち
こしらく。なかれいなうてそらあかつき。くもりくて
むかしわたせかくらしかれを心さし党めかり。
おなとききれぬなりいまさの月雨なるむ

物たるひのまへにつきしこともなとをかく
やいあまいさとく。あるか時さるかれ秋をおもし
るは。あかしやさうしかれ日に人をもなかり
人しもなき戸すれかしものねたし。まし
くかぬさきかきうてねのほとに夢さめた。
ゑりとこゝ露たり流草くにつきたるむし
よつき。あきはつきまで秋よりあり何きの月よ（のイ）
あさちか露かきわけくあきされともおのれに
人のゆかりこちあす。ま縁て悔しく思ひや
物ははかく秋（萱のけイ）のひあしひてれなかり
くれしなもめしくきとやうなかること

歎きけり。さりとてうしろれなれてもゐ給ひ
うしなはせ給ふや。御心をさらしくなげかけり。
あやしうなるあはれなる事はし給ひしに又
人はあてなきをみえしにつきさゆし。さ様に
なとかくあらをしもるゝしき事ともなく
しおもひれ事はたはかりしはのたま御さ
くらぬしはやしさうて給ひなれとおくさに
なしおもひあはらる様におもいなきもし。
あらはさるもしなかしおもひなきあつかひて。
ころりしおかりけるなんとかうれさとらり
あはむなるあはこのうしれ水晝をなこさせ

色々。られあつかひみちぬるのまゆのかたを
とられあまたしくなんてはなこし。れ歎あ
あられなれ、かやうにのてとれをひあつかひあるこそ
も哀るよくてつたそむ。とことゝや。るれ哀の
みしきあるへし。とこゝ哀く。おもくれは、ろの
あもよしたをられ。まるなかくれ世はなとに
ろうられぬ色させられ、なるひの御縁よ切してそむ
とこみ地しる、なる紙さあつかふくそり。素庭秋風し
こさ世よ縁つるてゝ日ある。とみくよるてゐまゝそ。
もあつりことなへりうくれなまなるつれとや
これもんのしぬはらわれ世のあやうゆらかて

こゑやまさやにとあり。みよ世帰るとも関
あはこゆるしの一日ふりしはおきまのみそしおほく
まうへし。ちゐ給ふのはせのりとこうに今かれ
れのせすれ飛鳥の御代よりもとよりも今の
うにはれをはまかゆかひのかりれこともいみ
すまてれくさしまさ後りうれしきこととえ
つきせぬあはれにそへつ。昔ぬとしをは先ち
あなちのゆをれ給ふ。御よりのなむおはしく
まさうしこそすな。花ありくれあらくもとる
く。かそこいせあなさわりうこくさもこ給
とよみ。ゐも雲も云ふし。侍人侍ちいひてしまし

こひをすし。さりてとふるなへともれは。宇
ぬはよるれのあをさしくんのほしさそへつ。み
白河のそをくさ後よりたひちもたへのなむ
もこをれ家あをやまふみくつさみてしまし
ちつくのされけりぬし花をなありあか秋
さと日たいはふつても。よあれもあささふともあさく
ある人すりあつもりてひろれさのあは月
こしを。られそうしてまいむ後うえてり
きみな雲をみてりれすゆして後さいらくる
しあさおかへらみたなふむし給しさ
こゑ。なのもまくなひくそのさるれ。さてもあるき

たさるゝとんなる。さきめれはしたこゝちはゆる
しのひあへす。あはれにくちをしくいふかひなきことも
なりはてられぬることゝして、かう思ひにゆく末の
さるへきことをゆかしさあつかひしに、はしたなき
しぬるにあつかひ。思ひもゆかしきことゝも宮なとに。
みなまかりてたのむ。あさはかなりあひなくて
くさの葉のつゆよ思ひしきえなむことの事。
ひとりのそのさをしして、かく思ひそむる。
さはしも、御みつからさしてまたよしとを
ちかきおくにのみてかうにおもほえはや
としあらかにも。やのかにやうしと

きしをはあうよはしに、やうくらきもてい
まみらさきたれはゆらめるかなゝく。
あかれたるもちつゝかそむるきとも心らう
みえ思ひかさねつゝはころらくゝやまれ
しかはかのゆくりなくゝさゝいてのついなかり
きみをもしろかたくつきてやうく成し知る。
月のころをとらんともゝことゝよたつる。
てらにまゐる日にもそひにしかうまつ
のこゝろすく。露のかゝるにさくれさへ
ゆふくれの気色もいそかぬ人すくなく
かしこし。時雨のけさもあはれなるにかく

もゐはやめくさとともなきおもひておさらか
なみだもさとおもりいて、けふとゆく、
めうこころえかたも。それとこなたにまうち
まかれん。それちかきはとかり月はてあれ
なとおかねさよすりゆくさうかく水すりな
くへの給ふりぬかせてとらへ給ひまとかる
しとうつせとれいゆきまいなら〳〵ほとく
籠しるゐまうゆきやとなりえひまさうる
はかれけりさとうもこりしれ日うりよ
れとるてゐなよなとかつうまといふといれい。
ともとなつのえいのかほりて大なる風なりむ

きこしなでゝなかもこともかゝりとともなく
つなくおつもてといふはとかりよきそなたれ
そのゆえなやうり。さて夢なおかえわさつく
よ婦うゆきされよのこと。そうとなまかれい
すうちをみる月のこと。おつとみなほとぶら
たなかい猫をうかゝてあさうい念まゆくの
もくらへおくらうれおてようろひわすり
ておかりるゐとつゝなるてをたこれ念月日
とおちてものひれいまなもこうとしる
よふきてはゐゆおかゝこととうて。猫なく
てかよるひはしのふまにすてわらくもち

のおほきさ中庵のおもとにねむりたまひても
すゝしきいましをかへしやらせ給ふをきく。
されはあまたのかさねなるゝをたれかしらむ。
露とあつかふ。うへはかくしたるをつゝみし給
まうらすむ。わかうらはしのこのひまなるを
めしつかひむ。むさしあはくらしめたる
ひとへ。そのうへのつまにはらくみせて
うつりかをたつこしの葉とあはせていふる
うつゐをこきしはしもすこしひかうつきを
てすれあかをとるころもてうちとたゆく
をはきをれいはおもめかうきをとりしをあえ

たつはくに。そめしくれなゐのあくまでのまく。
うつろひしたるによするくちいとしこしあ
くわたしたるまゝなきしたかへてゆしとそ
よそほひとみるへしみえとやまひのへよなみこそ
きらうすむく中く給ひ。あるむとくゆかしき。
むまれおもくへたにしもみてねらそとら
つきのこゆるにもそれらのきさきのれくに
やおうむしせむ色にまさるきむしはれ
うらみしとこきやまとしにそとうらうしく
たえのした葉いろしくそまるらく心はそまれる
なんれたうすくちうつろし給ふとかくいとく。

これつねはさかりとくらかくれたともなし。
なまよそけゆなけれ夜をあかして春日
とおもひしいうもくらしき。みえよりぬは流ふかう
みしらくかり。みかり月のあかりさとうそてみえ
はしなとをとらむも。川ちとみくそくなり。
むしもあはれなるにうくすかたもあをき
たなくいはりそすけの(へ)てり。よりなつく人
みくらなともわにようてりなりにかかり
とくにくはわたさかわれくあさかわり
ちかかたこかれ。かむるみしいの袖ぬれ。
露ならぬみしらしおもひしみし涙

はしもなかり。さりし涙ゆかんあさこよしとそれ
なからちかうそへの月(君イ)みえ人もなくゝ。しくし
なまめきとれうしなみ。えひ地よんさいかへ
はなかり。ゆかやをわたくしさゝ紅葉より
いてやなあゆしてもいは袖こかもさしこにた
ら枝もなうしゆいなかくそ。こはたの涙
むしまれあられはそこもくもとめ月のきぬさし
みなもひあはゆはにゆふきり袖ぬれりてみ。
やなみかれりしこきそうしなみ。それはもろる
をさとりいことしさやとにまつてる
えくうとくみなむつてそ。地れもひまゝる

ことのし。そてのこほりとけぬらむ。絲
さえんこゝろのかれにし恋とわすれて。たゞ
わさとかなしてたのむや後のこともさそれ
たかはかなうと。あまりてゆめのうちはけれと
なさしなきこそはそくたゞふかくわかちり。
恋よこともんことはまつしてでゆきと
うつゝのこゝろはしゝゆきこそりあへあまらい
ゆきをわけてまうでたりへつま。こそわまさらて
るいとふ夢とむと思あとこれを夜り。
らかまいなあとみはとなれいくりして
あてしらませんれうりくあかくさけく

きく。いけしのやなやうしてあなかしこむとゆく
いつはつくらぬとも夢をも人をとゝかり
夢。こゝろしこゝろありしし夢。いれしうこそ
うくしねかうくこれよつきてかめやかる世
中みいのかそさくをれゝうへとなるふれの都
しむのあしせ。さ待とをむとれしろとくあ
られむかとすくして。せうらとゆかく
もうへ緑乃なとく野へりいてとのゝいうら
とふれよあへよしむきのへうゆとこゝろ
わきとはりみらんなと。みへりはしつまく
をう秋をかう夢りとなとりし夢。黄

身をしらぬ人こそなかりけれわかまゝのよ
やすむ事なくしてなほよしといふことは
うたがひもなきほどはいかにしてもさむ
をのいひならはしことをしるこの身をとり
ころのをもうらみなくされとおもふとも
いくたひかわれはさはなれはのかのは
まえんなるのゝ世をすてかたのやゝ
かなのこゝろをしらぬことをしらめ
これてありこゝろしたうしまめ
つねをわかれなるよの世中をそへ
くらへてなけれりけ

文

同

世中のありさまをみるにいひしはなく
さゝやかなるよりはしめてもよくまいる
ことのはかなる草のうへにいとまなき
これよりのちにおもひなとせんをもわかれ
さそそれなのこゝろをさしてなりてうし
こゝろをみたる人よりかそてなれともけふ
さゝめことをいひよみなれるしゆ
うらなりけれはそれのやすきはいふ
おもへはたゝにいひもしらぬやしきあしき

はなしれいはこそあはれ然とく〳〵ぬられせよ
とやしされとこんとうき。いやしこせ給と
きとれれとぞあへくえれぞれとせかなうと給ふ
うつゝむく。とくせよ給ふせまうかゝさあはれなし
人のこく。宗とくとあわくとなりきれるを
すせ。さいたい色いもしにさき給ひゆのせ云ふ
えれなし人のこにとなりこすり。むうし
ゐぬうれやしさすにしるんうしなす。
ちう秋つゝこゝねりしもとう〳〵なきことん
こゝしくにとつむそうれしくぬらろとらふ
との比らくわりしと。奨（せよく）よめうしきえん

うるかり。くさしとけくうつひさむ春なさけの
こゝそ。そとやうすれもやむりかさみよう沢
庵さとく。そ給のちうさなうそ。ありりな
みろつとみうさと汁くたなすとうゆ
いらとく。やまくさとくうくし。
あさうや給とうむいて。あきはのうたに
まき秋なく言をと給むやいは。あいのさいえま
いくれはむ。てい。給うれのし給りもち
とつうむ。すくいるうゝとりうらをむてうれ
是すまあれことはつひ。そうまきれゆくされ
とらこれは。あつ程とこそあ屋うすう。給くる

とぬれともみなまへりしにくへむまみなや
うちといひつゝ月のかけみえすなりゆくもくり
れとしては後なしにとおもひとゝまりや・かさ先
らるくち残とゝめ・月のにならむてらとれ
わかなまかれて・そあかまれかなもれうり
うふみとこれなくそうすみそうおもふも
れきれとへかそての袖くきおきゆく
とわしむま・とらえつこなとこなをまつは・
なとくらわしいあつもら春まあとな
しむつりうわれもとくしたくみなれ
とくまこそおつ先・ともそ在こうりにこそ行ぬ

へ・ふれらまち見れ飽みも袖をりてわたよへ・
ふよいつれなりわつくなにそこそのをら
すのうえりうへれのまほて・秋つしくやし
ふむさきとしそ・月ゆめくれの命のおもみ・
露きしやつめくもむしつなおもりして
とこゆつさとかわまなこと次くゆちまあり
これよりあ残行にしこみゆくさこなとこそ
みし・和しもたかきの袖へとつむし露やし・
おもそれめつ・きとみえとつ枝と・られけれ和し
まさりと袖つもと・めつこれとこよ外し佐也見・
あさららそれ露し・言く行くとみやとに、

国立公文書館 National Archives of Japan

はこれすしあ待ぬるやてみ。かゝるようゝ人道
人とめくし。とくせとらてたち人いつるかたに
そら思つゝすちゝ。なはりけるおよかなたへ。
むかしよりあられかゝりらゝ。かしいかもの
いかむそくある。しほりそむおふらかに
い色久てなき御ゝかしめらへこのかろこしかめて。
かきさのてやまめ画ゝやめてなる。かり
もおもくうみるとゝて。なみあへさめ
く御めゝしとうしゝゝめ。らな人えよ細る
もとにらひくゝし。らふとわかこゝろとみゝの
くし。まれかゝゆめらよくぬ御しぬさわか

しふのかれの見ところはんと御めてゝし。
ちる心とれなくるをとゝしにたよりはまに。
ゆふ侍きよりきたくうらすれ。秋やうく
おきゆき。はさしいけるまてあしそみよ
こゝとれうく行とはえるか。とくおかれいおもと
とゝちつゐ世の中よ。かそねゝしこか
侍りれそのよ行つらく。いてあまたすれかて
まやむられき。笑成かしされらしろしと
又と。けかよゑそゝるか。やうくあらとよちろさ
くはゝよらつあいぬとにいてうれきん。かんち
とせみつあそるよとんそめつしよきん。侍れ

あいつりをはなちて。いつくかへらせとうそ
へむ。かなかやうなれとん。なりとんえもとこそ
きなれともこゝむ。されなこ給をかすれなん。
ならとんなつしさまりいきん。はもれいのち
ぬは。おさろかのしはあやさきみかそり
なを給をいなみをとみぬをなみてきぬされ
とこいうされいつりとみんわきこみ。こ給をされ
られとうんせ。いろめわかれこそせなく。らしとつし
まれきれよをさつなる。めて。いきとかのつな
らさなことひかくきをれをし。宮れこみとり
たつひけ。つひあけむかむてわてをれはるゝと

くしむとみつりこともあし。みむ。おてしともこしあ
やうなり。これなは光れとこの御まなり
ことなるとのれくりく。うちまかなかり。かくと
うらなとんなら。こわけのなくよさと給り
まつ。されなうりなくをりこなるせとく給
こみやとまら。かさのこみを。おつてをおりてぬやかなむ
とおもしくつとか(につ)つうしこみこれなかへり
まんうらゝのとまつ。そのかくるのもし光。
秋のとうりなりまう桜ハくさ本を女まやう
くられもくいく。はまもしくなる御てり。
ちつしさやまむかりとしくこみさみなやこ

とられさけもいやしうむさうこともりうくおもむ。
あんないしゆへしられたるもおなへしとくいぬこし
かの給ふをつきさ給ふめんなともいはこそかは
ますみえける事こしよ世中のつねなれはあはれ
むるゆへ。そくにゆき給ふらむしとらし。あるは
とれそおほさのをゆしめはうさいりあく
そらおもせとし玉ふらましけれとんなともいは
給さのおしして。そうくさいのおあけく
しらえん家なしくさとこそやまむさりし
そうのつ給みしらなひてる世ち給ひところむ
人おもてつへみて。さきつ給ふわれかりり。をそこせ

くるとしくあるんしもりもいところしやまちるよ
はさて。きつかはとりことをうなはせお。御
てかゝろこはいたをひこゆくや唐とすんや。く
ろうしとしさしむろよすはあるひそおかれ
みとはいるのかなしきん。人をなかやのたく
るかくいたく。たはかそれなしのなるそするまれは。
おせのなりぬいをきつとれひわすなし。
身もよゆうしらえをたれをし給ひり
とれはみえをさくうちゆ給えさらまもちえ
そろ。おみのほりを心のうちあんゆきさうて
しゆのてきしまうひ身てとれは。給ひさ御わ

ことすくて。これあつむるにても（に）ゆきほたるをも。
ちりみえて色ことにはなくてりられたくみ
かく色にこゝろをいれしれとゆくすゑまてなれなる
しらぬとさりさこうてりのはなくやときゝ給いへ。
後くるさまにてをしろくさりちそ。それの
ときうなれき。たをとおきつもく
くとりゆくまかんこなくつくつくゆうかもと
まゐりみちなかとあはれてもそ

応詔和歌序　橘正通

ちとせや雄の秋な月のはこゑのもむしとなけれは
もすりまれの山もこれいみまことのうくまえ
のくさしこゝろせきをよぶし住るなりれ
おしめ後とゆかりゆかふのいるるをせ給ひて。
人くわきさこ雄くふかうえりゆまくまよう
あるをとくるまう次うれのりとれ海うちまさ
これやうなるあり秋の花の葉のやまつの
みさらそ色つれましかとことさまれてくし
きこと次るなうてのいはも雄のし給かを
ふとおくく庭のりみちまうれの葉ゆふ色
れたくれこれうらあるれの和歌をみもちく海ゆの
船し後さみちかいるそれて秋なことれとのか

見とかり、みて中将へかへりみちてきこえて
とおもくさく母とし執着してあさゝとくすく
なん侍らくさく、わしくせぬよりはわか
とかみえもやあり、ものゝ侍るにそ御らんなく
みかきこともあらはにつきくも、しとれさのくら
くるしさはをとこしきを見て、年ころよにいへ

枕草子跋

清少納言

このくさしあり、文字もかく書とあり
あり、筆も流れたるをそへ、見えとかさなく
えや、これはしゝのりみゆることありゆ

のよしすもあやしきを、人やは見んとすらんと思
ひて、つれ〳〵なる里居の程に書あつめたるを、あい
なう人のために便なきいひすくしもしつへき所
々もあれは、よくかくしおきたりと思ひしを、心
よりほかにこそもりいてにけれ
宮の御前に、内のおとゝたてまつり給へりしを御覧し
て、これに何をかゝましと、御前
にはおほせられしは、史記といふ文をなんかゝせ給へり
へるなとのたまはせしを、枕にこそは
侍らめと申ししかは、さらはえよとて給はせ
たりしを、ものおほく里にて書つくさん

御門の恋しくれもなほさらにかなしき
うすやうやかりやとはさせ給ふはつれ
紙のうちとれ給ふさしかきしにけるも氏
なれしなかに我なからや。大方是を世の中
なり。中しくもめでたくなし。人の思ひなさず
とえらなかに男女の中にも木草鳥虫をもいふ
かしをしかいふもいとゞはしまへれらくかる
まりともあゝ徒先に立ちよりおとなすと。
女のゝ捨てりしきれなき捨て地よ出まし更。
人なくかる色花のてとする色こそ地のかれ
されどいひしりえかりしすしみたる人のおもの

されしはあやしく我ありや。常ならぬを
こころなり人のみしむともうしこゝろにはしる
ともおもしと云へるなんの命らるをしくわかれ。
さる人よみてきんそわれさらや

扶桑拾葉集巻第三終

日本政府圖書
太政官文庫

国立公文書館
National Archives of Japan